論文

# 正しい批判はいかにあるべきか

## ——教条主義批判を装った修正主義——

山本二三丸

まえがき
第一節　予備的注意
第二節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その一)
第三節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その二)
第四節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その三)
第五節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その四)
第六節　榊氏による修正主義批判
第七節　榊氏の「教条主義批判」の客観的意義
むすび

### まえがき

一九六六年九月七日付の「学生新聞」紙上に、榊利夫氏は、「『修正主義批判』を装った教条主義」という題目のもとに相当長い論文をものされ、そのなかで、その副題に明示されてあるように、「藤本進治、山本二三丸両氏の著書」をとりあげ、これらはいずれも「修正主義批判」と銘打ってあるが、きわめて危険なもので、根本から「教条主義的」、「セクト主義的」誤りを犯しているものだという、批判をあたえられた。わたしはこの新聞についてはまったく

なにも知らなかったが、二ヶ月近くたってから友人によってもたらされた二通の「学生新聞」をみて、はじめてこのことを知ることができた。その一通は、右の論文が載っている九月七日号であるが、他の一通は、それより二ヶ月近く前の、七月十三日号であって、この号にも、わたしの著書についての批評が載せられていた。その批評の筆者は、評論家の三輪浩氏で、題名は「マルクス主義的著作の最近の傾向(下)」と記されてある。この三輪氏の論文は、最近のマルクス主義的文献のなかに根強くあらわれている構造改革論や修正主義的偏向をもった著作を指摘し、それらのまちがった傾向の特徴を挙げ、その誤りとたたかい、これを克服すべきであるという趣旨のことを述べたものであるが、そのなかから、拙著にふれていると思われるところをつぎに引用してお目にかけよう。これは、三輪氏の論文の最後におかれている結びである。

「なお以上のような修正主義にたいする批判をより深めるために、前回紹介したもの以外につぎのような文献と著作の研究が有益である。(1)『日本共産党重要論文集』Ⅰ・Ⅱ。(2)『日本共産党第九回大会決定』(『前衛』別冊)。(3)宮本顕治『日本革命の展望』、『現在の課題と日本共産党』上、下。(4)上田耕一郎『マルクス主義と平和運動』、不破哲三『マルクス主義と現代修正主義』。(5)榊利夫『帝国主義と独占資本のイデオロギー』、『現代修正主義とはなにか』。(6)山本二三丸『構造改革論批判』(青木書店、この本は石堂・佐藤編『構造改革とはどういうものか』〈一九六一年、青木書店〉を全面的に検討・批判したものである)」(傍点—山本)。

ごらんのように、わたしひとりをのぞいて、ここに列挙された著者たちは、すべて日本共産党の輝やかしい「指導者」でいられるか、あるいは榊氏のように「マルクス・レーニン主義者」をもって自ら任じていられる方たちばかりである。それらの自他ともに許す「マルクス・レーニン主義者」たちの著書に伍して、名もなき一介の教師たるわた

しの著書を挙げてもらったということだけで、わたしには過分の思いがあった。ところが、それから二ヶ月もたたないうちに、三輪氏の挙げられた「有益な著作」の著者のうち、(5)の榊氏が、(6)の山本にたいして、同じ「学生新聞」紙上に、その徹底的批判の論文を発表されるということになった次第である。

(5)の著書も(6)の著書も同じく修正主義批判をいわば看板としているもので、発行の時期もあまりちがわず、それに同じ青木書店の刊行である。この資本主義社会では商業出版社の出す本はすべて商品であることを免れないから、ひとによっては、(5)の著者の(6)の著者にたいする非難攻撃を目して経済上、名誉上の「競争」のあらわれと勘ぐる向きもあるかもしれない。だが、そのような穿鑿は、好事家にまかしておいて結構である。われわれにとって決定的に重要なのは、「日本共産党中央委員会発行」と署名された同じ「学生新聞」紙上で、おそらくは「マルクス・レーニン主義者」でいられる三輪氏が拙著にたいして「有益」として推賞の言葉を述べていられるのにたいして、同じ「マルクス・レーニン主義者」をもって自任される榊氏が、そのわずか一ヶ月半後に、たちまち拙著にたいして「有害」として全面的打倒の言葉を並べていられるという、客観的にみれば、まさに「豹変」としか言いようのない、事実そのものである。すこしでも筋道のとおった考え方をするならば、三輪氏も榊氏も同じ「マルクス・レーニン主義者」であられるならば——そしてまた、事実「マルクス・レーニン主義者」であられるはずであるが——、同じ著書にたいする評価がこのようにまったくあべこべになるということは、とうていありえないこととおもわれる。同じ著書にたいする批評が、「推賞」であっても「非難攻撃」であっても、そのどちらもがりっぱな「マルクス・レーニン主義的」批評であり、そのどちらの批判家もりっぱな「マルクス・レーニン主義者」であるなどということが、いったい言えるであろうか？　だからして、筋道をとおすならば、両氏とも「マルクス・レーニン主義者」という形式はそなえて

いられるが、その中味はかならずしも形式とは合致しないで、どちらか一方の方が「マルクス・レーニン主義者」の実をもっていられ、他方の方は、その実質を欠いていられる人、つまり非「マルクス・レーニン主義者」または反「マルクス・レーニン主義者」でいられるはずだ、ということになるであろう。三輪氏はおそらく榊氏を目して同じ「マルクス・レーニン主義者」であるとされているであろうし、榊氏はまた、御自身「マルクス・レーニン主義者」をもって自任され、三輪氏の推賞をそのまま受けていられるようであるから、右の形式と実質とがあべこべになっているのは、どうやら榊氏の方ではないかと思われるが、このことは、また、榊氏が右の三輪氏の批評についてこれをまったく不問に付していられるという事実によっても、りっぱに裏書きされているように考えられる。三輪氏の論文は、同じ「修正主義批判」をテーマとし、榊氏の著書をも、また榊氏がこれからぜひとも非難攻撃しないではおられない山本の著書をも、同じく並べて推賞されている。しかも同じ「学生新聞」紙上で。榊氏が、もしこの三輪論文をまったく知られないで、いきなり拙著批判をものされたというのであれば、これは必要な手数をかけることができなかったもの、あるいは当然の考慮をなおざりしたものという非難をまぬがれないであろう。このようなことは、全体的な関連を正しく考慮すべきだということをつねに実行しているはずの「マルクス・レーニン主義者」が、いったい、やれることだろうか？　「マルクス・レーニン主義者」として当然知っていなければならないし、また事実榊氏が三輪論文をよく知っていられたとした場合、知っていてなおかつこれについて沈黙をまもっているということは、いったい、どう説明することができるであろうか？　とうてい相容れない「教条主義的」「セクト主義的」著書を「有益」だとして推賞している三輪氏の批評を、どうして不問に付しておくことができるであろうか？

しかし、いずれにしてもたんに形式の上からだけでその批評が「マルクス・レーニン主義的」であるかどうか、そ

の批判家自身が「マルクス・レーニン主義者」であるか否かを判断することは、軽卒のそしりをまぬがれないであろう。われわれは、その論者の主観的意図や自称などにとらわれることなく、批判の内容について、実際にそれが「マルクス・レーニン主義的」かどうかを見きわめなければならない。そして、その論者の批判の内容がどのようなものであるかが明らかにされたところで、論者自身がはたして「マルクス・レーニン主義者」の名に値しうるものかいなかも、おのづから明白となるであろう。

ところで、榊氏の批判についての実質的な吟味も必要ではあるが、それにおとらず重要な意味をもっていると考えられるのは、さきにみたように、積極的推賞の批評が、わずか一ケ月半のうちに積極的打倒の批評に「豹変」したという、事実そのものである。「学生新聞」は「日本共産党中央委員会」によって発行されているものであるから、「わが国のマルクス・レーニン主義者」のうちのとくにすぐれた「指導者」たちの承認または指示のもとに論説が掲載されていることはうたがいないところであろう。では、右のような「豹変」あるいは正しくは一八〇度転回は、いったい、どうして生じえたものであろうか？ この転回そのものが示している客観的意義についても、われわれは、当然、十分な究明をこころみる必要があろうし、またこの点の究明のためにも榊氏論文の慎重な検討がなされなければならないと考えられる。ただひとつ、このことに関連してあらかじめ注意をうながしておきたいと思うのは、右の二つの批評が発表された間の時期、つまり一九六六年七月から八月にかけての時期がもっている重要な歴史的意義である。今日もなおひきつづいて全世界をゆりうごかしている中国大文化革命が展開されはじめたのは、まさにこの時期であり、またこれと関連して、日中両国共産党会談の全面的決裂が伝えられたのも、またこの時期である。この時期の歴史的意義は、きわめて重大なものであるが、われわれの当面の問題にとっても無視することのできない重要な歴史的背景

をなしているように思われるのである。

いずれにしても、榊氏の拙著批判は、のちに詳細にみられるように、きわめて手きびしいもので、拙著のとりえとしては、石堂・佐藤両氏編『構造改革とはどういうものか』の「批判をすることの積極性だけが認められる」というだけで、他はことごとく誤謬、欠陥、偏向にすぎず、最悪の「教条主義」、「セクト主義」、「事大主義」の主張だとして断罪されている。つまり、拙著の内容を真面目にとりあげ、その正確な吟味によって結論をひきだすという当然の手数はすっかり省略されて、はじめから「やっつける」ために、用意のレッテル――「教条主義的」、「セクト主義的」、「事大主義的」――をそこらじゅうにはりつけることに専念していられるのである。こういうレッテルはり式の批判は、いくらその論者が善意であったとしても、良心的な読者を納得させるわけにはいかないであろう。というのは、わたしの著書を一読しさえすれば、榊氏の批判がその実際の内容についてほとんどふれることをしていないし、また内容についてとりあげるときにはその実際をゆがめてこじつけばかりしているという事実を簡単に見てとることができるはずだからである。わたしも、そのように考えて、このようなレッテルはりの「やっつけ」式批判を問題としてとりあげるのはあまり意味がないものと判断して、そのままにうちすてておいたものであった。だが、修正主義批判の最近のあり方をみていると、このように無意味なものとして不問に付しておくことは正しくないと考えるようになった。第一、榊氏のいわれないいいがかりや「やっつけ」的レッテルはりにたいしては、正しく事実を挙げてこれをひっくりかえしておくことが、良心的な読者にたいする当事者の義務であって、この点を無視することはゆるされない。第二に、右にのべたような「豹変」＝一八〇度転回の客観的意義を明らかにしておくことは、今日なおますます決定的な意味をもつものとなってきている。そして、第三に、榊氏の論文があまりにもひどいものでおよそ正しい

意味の批判、つまりあるべきマルクス・レーニン主義的批判からまったくかけはなれた歪んだ批判の典型にもなっているので、このさい、これをひとつの悪い見本として役立て、正しい批判はいかにあるべきかということを、榊氏論文の詳細な批判を実地におこなうことによって、できるだけ明らかにしておくことが、時宜にもっとも適したことと考えられたのである。

そこで、以上、三つの点を考慮にいれ、――というよりは、むしろ三つの課題を解決するという意味で、といった方がより適切であるが、――わたしは、さしあたりまず、榊氏の拙著批判論文を丹念に吟味することにしたいと思う。くりかえすまでもなく、わたしは、そこに記された文字の意味を厳密・正確にとらえることによって事実をもって事柄を説明するというやり方を堅持していくつもりである。榊氏の拙著批判が大体どのような内容のものかが、事実をもって示されたあとで、つぎに、榊氏自身が「修正主義」をどのように「批判」していられるかを、氏の書かれた労作の中の文字と事実とを対比させることによって、同じように客観的に、正確に把握することをこころみたいと思う。榊氏もわたしもともに「修正主義」を「批判」しているのに、その榊氏が山本の「修正主義批判」はまったく誤りだらけで排撃すべきものだと主張していられるわけであるから、「修正主義」という言葉の理解にしても、またそれにたいする批判のあり方についても、榊氏のそれはわたしのとは決定的にかけはなれており、場合によっては正反対のものでもあるはずである。榊氏の拙著批判の吟味が、榊氏自身の「修正主義批判」の実態の吟味に発展せざるをえないのは、理の当然であろう。そして、最後に、榊氏の拙著攻撃のもっている客観的意義と、したがってさきにあげた「豹変」＝一八〇度転回のかくれた意味とをできるだけ冷静に、もっぱら事実そのものをよりどころとして、究明することをこころみたいとおもう。

## 第一節　予備的注意

### 一

わたしの著書『構造改革論批判』にたいする榊氏の批判論文の吟味にとりかかるまえに、必要だとおもわれる予備的注意を二、三書きとめておこう。

その第一点は、「修正主義」とか「教条主義」という言葉の使い方についてである。榊氏の批判論文は、ごらんのようにたいへんまぎらわしい題名がつけられている。「修正主義」といい「教条主義」といい、そのどちらもまちがった考え方、マルクス・レーニン主義の基本原則をゆがめ、そこなうものでしかないということは、だれしも感じとしてもっている。だが、「修正主義」と「教条主義」との内容について、それらのちがいと関連はどうかということになると、そう簡単には説明できない。だから、われわれが、「修正主義」とか「教条主義」とかいう二つの言葉をつかって議論をするときには、まえもって、それらがどういう内容のものか、両者のちがいと関連はどのようになっているかということについて、簡単な、だが正確な説明を与えておくことがぜひとも必要である。まして、榊氏のばあいのようにことさらまぎらわしい題目をつけて他人の著作を批判するようなときには、右の二つの言葉について的確な概念規定をあらかじめ与えておくことは、当然の義務でもある。それは、たんに議論を論理的に正しく展開するために必要であるばかりでなく、問題そのものの意味をただしく読者に伝えるためにも欠くことのできないものであるはずである。この二つの言葉について必要な説明をまったくすることなしに、あの説は修正主義だ、この主張は教条

主義だとやってみても、それは、所詮、うすっぺらなレッテルおしつけでしかなくなる。榊氏は、さきにみたように『現代修正主義とはなにか』という著書をものされているが、その奥付によると、「唯物論研究会々員」でいられるそうである。それゆえ、右の二つの言葉の内容については十分よく知っていられるはずだし、両者についての的確な説明が批判論文の中で示されてよいはずである。ところが、事実はどうかというと、右のような簡単な概念規定はおろか、「修正主義」と「教条主義」とのちがいと関連についても、ほんのこれっぽっちの説明も見あたらないのである。榊氏の批判論文の構成要素は、要するに、「教条主義」、「セクト主義」、「事大主義的」という断定とレッテルだけなのである。わたしの著書をとらえてなぜこれを「教条主義的」と規定しなければならないかという、肝腎の問題についての理由づけはいっさい無しという有様である。(1)

(1) 榊氏は、おそらくその論文全体がその理由づけだと強弁されることであろう。しかし、どんなにたくさんレッテルをはりつけたところで、理由づけにはならない。その全文をとおして理由づけらしいものとしてこじつけられる箇所は、たったひとつだけ見出される。それは、つぎのようなくだりである。

「……以上の諸欠陥（誤り）の必然的な結果として、反帝反独占の人民の民主主義革命の課題はまったくでてこないし、むしろ、プロレタリア革命を事実上当面する課題として押しだしていることである」。

つまり、人民民主主義革命を当面の課題としないでプロレタリア革命を当面の課題だとしているから、教条主義であり、セクト主義だといわれるのである。

だが、いったい、ここに示されている榊氏の文章そのものは、わたしの著書を「教条主義的」、「セクト主義的」ときめつけるための十分な理由づけとして、うまく役立つことができるものだろうか？　この文章は、むしろ、マルクス・レーニン主義の初歩的知識についての榊氏自身のおどろくべき無知と混乱とをさらけだすものとはなっていないだろうか？　唯物論研究家でいらっしゃる榊氏よ、いったい、人民民主主義革命とプロレタリア革命とでは、どこがどのようにちがうといわれるのか？　いったい、人民民主主義革命はプロレタリア革命ではなく、プロレタリア革命は人民民主主義革命ではないなどという知識を、ど

こで、どのようにして仕入れてこられたものであるのか？　どうやら榊氏は、唯物論の専門家でいられるかもしれないが、唯物弁証法とはまったく無縁でいらっしゃるようである。ここのくだりは、行論においてより詳しく検討する価値が十分あると思われるが、榊氏よ、どうかできるだけ早く、はっきりと、右の疑問――人民民主主義革命とプロレタリア革命とは、どうちがっているのか？――に答えていただきたい。明確なお答えのないかぎり、「教条主義的」、「事大主義的」というレッテルは榊氏自身にもっともふさわしいものとしてお返ししておくことにしよう。

榊氏自身の著書はことさら『現代修正主義とはなにか』という題目をもっているのであるから、「修正主義」および「教条主義」についての概念規定は当然はじめに与えられていてしかるべきものと考えられるが、事実はそうではなく、それらしい説明が見出されるのは、わずかにつぎの一箇所だけである。

「……修正主義とは、革命的マルクス主義の内部から敵対潮流として生まれ、現実を創造的に考察するといった口実でマルクス主義の実証ずみの根本命題を再検討、修正しようとめざす。哲学、経済学、社会主義理論（革命理論）の各分野でそうである。その方向は、意識的にあるいは無意識的に科学的、革命的なマルクス主義理論を、非科学的な、ブルジョア的、改良主義的見解にとってかえることである。修正主義者は、革命的労働運動・共産主義運動を実践的に導くマルクス主義の基本原則をねじまげ、これを亡きものにしようとするものである」（前出、三五―三六ページ）。

この一節は、榊氏自身の手でつくられた文章のような体裁をとっているが、実は、レーニンが一九〇八年に発表した論文、「マルクス主義と修正主義」から、榊氏の流儀にしたがって適当にひきぬいてきたものをつづりあわせたものである。レーニンの文章をそのままひきうつしたのであれば、文章そのものは一応問題のないものとして通るはずである。だが、榊氏は、レーニンの論文をことわりなく借用されるにさいしては、どうしても氏独特の加筆や訂正を

ほどこさずにはいられなかったようである。このレーニンの論文は、修正主義とはどういうものかを明らかにするさいには誰しも第一の理論的拠りどころとしているもので、きわめて重要な意義をもっているものであるが、この論文の内容については、榊氏自身の「修正主義批判」がどのようなものかを検討するところで詳しくみることにしよう。ここでは、レーニンの論文とこれを無断借用して作製された榊氏の右の文章との大きなちがいについて簡単に指摘しておくにとどめよう。

レーニンは、その論文のはじめで、

「マルクスの学説は、近代社会の先進的階級を啓蒙し組織するのに直接役立つのであり、この階級の任務を示し、現代の制度が――経済的発展によって――不可避的に新しい制度と交代することを証明しているものであるから、この学説がその生涯の一歩一歩を、戦いとっていかなければならなかったのは、異とするにたりない。」（全集第四版、第十五巻、一七ページ）

と述べて、マルクス主義はまず、「その成立後の最初の半世紀間（十九世紀の四〇年代以降の）」、それに敵対するもろもろの理論と闘争しなければならなかったが、これに打ち勝ち、「敵対する学説を駆逐してしまうと、これらの学説に表現されていた諸傾向は別の道をさがしはじめた。闘争の形態ときっかけは変ったが、闘争はつづいた」と説明し、

「そして、マルクス主義の成立後の第二の半世紀は、マルクス主義の内部にあってマルクス主義に敵対する潮流との闘争をもってはじまった（前世紀の九〇年代）[2]。」（前出、一八ページ）

として、「マルクス訂正、マルクス改訂、つまり修正主義の潮流」の必然的形成を説明している。

（2）この文章をそのまま無断で借りてきたものが、つまり榊氏の「修正主義とは、革命的マルクス主義の内部から敵対潮流として生まれ」という文章であるということは、これを推察するにかたくない。ただレーニンのばあいには、マルクス主義に根本的に敵対する潮流はずっと以前から――十九世紀の四〇年代以降――存在していて、マルクス主義によって全面的に打倒されたがために、今度は、これらの敵対潮流は「別の道をさがし」て、「マルクス主義の内部にあってマルクス主義に敵対する潮流」となってあらわれたとされている。ところが、榊氏にあっては、これとまったくちがって「革命的マルクス主義の内部から敵対潮流として」はじめて「生まれた」ものだそうである。「革命的マルクス主義」というように「革命的」がきわめてはっきりしていて、これにたいしてたとえば「平和的マルクス主義」というものがあるとすれば、そもそも「革命的マルクス主義」そのものの内部から「改訂」「修正」は生まれようがない。しかも、榊氏は、この「革命的マルクス主義」そのものの「内部」からはじめて敵対潮流として「生まれ」たと述べていられるのである。レーニンにあっては、マルクス主義はその成立以来「敵対潮流」との闘争をよぎなくされているのであって、同じ「敵対潮流」がただ「闘争の形態ときっかけ」を変えただけなのである。このことは、本文でつぎにかかげるレーニン自身の文章によってもあきらかである。

右につづいて、レーニンは、「前マルクス主義的社会主義は粉砕された。それは、もはやそれ自身の独自の基礎のうえにではなく、マルクス主義を共通の基盤として、修正主義として闘争をつづけている。では、修正主義の思想的内容はどのようなものかを検討してみよう。」（前出、一九ページ）

と述べて、まず「哲学の分野」からはじまり、「経済学」の分野、「政治の分野」のそれぞれにおいて、修正主義者がどういう命題をどのように説明してマルクス主義の改訂、修正を主張しているかということを詳細に説明している。そのうちでレーニンがもっとも力をこめて「修正主義者」の主張を説明しているのは「政治の分野」についてであって、そこでは、「階級闘争の学説」を改訂しようとして、「政治的自由、民主主義、普通選挙権」が「階級闘争の基盤を絶滅し」たことによって、国家は階級支配の機関ではなくなり、「多数者の意志」により「議会制度」を通じて社会主義に到達できると主張する修正主義理論の全内容が徹底的に論破されているのである。レーニンは、たんに

「マルクス主義の根本命題」とか「革命的なマルクス主義理論」とか「マルクス主義の基本原則」などという文字ばかりをあしらって、一般的に「修正」とか「改訂」とかいう言葉そのものの意味を説明しているのではけっしてない。レーニンは、修正主義的主張にたいして、明確にそれがどのような「基本原則」をどのようにゆがめ、「改訂」しているかを説明しないで「修正主義」とはなにかということは、けっして説明されたものではないということをよく知っていたのであって、それゆえにこそ、「議会制度と民主主義」を社会主義革命の重要手段だというように「改訂」した修正主義的主張にたいして、このうえもなくはっきりと、つぎのように述べているのである。

「議会制度は、もっとも民主主義的なブルジョア共和国でさえ階級抑圧の機関であるという本質を除去するものではなく、それをむきだしにする。議会制度は、以前に政治的事件に積極的に参加していた人々よりはるかに広範囲の住民大衆を啓蒙し組織することをたすけるが、このことは、危機と政治革命の除去を準備するものではなくて、この革命のさいに国内戦が極度に激化することを準備する。……(中略)……。議会制度とブルジョア民主主義との不可避的な内的弁証法――すなわち争論の解決が以前よりもいっそうするどく大衆の強力によっておこなわれるという――を理解しないものは、労働者大衆にこうした『争論』へ勝利的に参加する準備をほんとうにさせる、原則的に一貫した宣伝、煽動を、この議会制度を基盤としておこなうことは、けっしてできないであろう」(前出、二二―二三ページ、傍点―山本)。

ごらんのように、一方における「議会制度と民主主義」と他方における「国内戦と強力による変革」とのあいだの正しい関連の原則的把握、――これこそが「政治の分野」でのマルクス主義の革命的な「基本原則」であり、「根本命題」である。この点を明確に示すことをしないで、どうして「基本原則」などという一般的な用語だけで、「修正主

義」の「修正」の真の意義をあきらかにできるであろうか？

ところが、わが榊氏は、このレーニンの論文をひきうつして、まず、レーニンの「哲学、経済学、政治の各分野」を「哲学、経済学、社会主義理論（革命理論）の分野」というように、混乱した表現におきかえられる。「哲学の分野」、「経済学の分野」に対してかかげうる言葉は、当然に「政治の分野」以外にはありえないのであって、「社会主義理論」とか「革命理論」などという榊氏の表現がまったく不適当であることは、いうまでもない。つぎに、榊氏は、「マルクス主義の実証ずみの根本命題」という言葉を創造的につかっていられる。榊氏よ、あなたは、「実証ずみ」という日本語を、いったい、知っておいでであろうか？　「実証ずみ」という言葉は、特定の人によって実証されたものというだけではなくして、それは一般的に「実証されたもの」であって、誰しもそれが真理であることをもはや疑いえないものになっているというときに、はじめて用いられるものであって、それが絶対に正しい真理であることがふつうの人間に簡単にわからないようなときには、それを「実証ずみ」と称することは、まったく誤りである。だが、いったい、「修正主義者」は、誰がみてもそれが真理であることが明らかであり、とっくの昔に実証されてしまっている――「実証ずみ」――ような命題をとりあげて、どうしようというのであろう。「実証ずみ」の命題では、それが真理でありえないということを、どうして人に納得させえようか？　「実証ずみ」ということがなかなかむづかしいからこそ、その「基本原則」、「根本命題」を正しくないもの、「つねに絶対に妥当するものとはいえないもの」というように「改訂」し「修正」することが可能でもあり、またそれが一定の効果をもちうるのである。しかも、「実証ずみの根本命題」とことさら言われながら、それがどのようなものか、その内容については、まったく説明はされていないのである。榊氏よ、どうか、この「実証ずみの根本命題」というものが、その実どんなものであるか、

ほんのひとつふたつでよいから、挙げてくれたまえ。そうすれば、その「根本命題」、「基本原則」が、「実証ずみ」であるどころか、榊氏自身にとってさえもまったく「実証されえないもの」となっているという事実が、このうえもなくよくわかることになるであろう。いや、「実証されえないもの」どころではない。もっと正確にいえば、「実証ずみの根本命題」を「実証されないもの」としてその「改訂」を主張されているのが、ほかならぬ当の榊氏であるということ、つまり榊氏自身がその「実証ずみの根本命題」の「修正」を主張していられるというような事態が、明白になってくるはずである。だが、この点の究明は後段にゆづろう。

さらに、レーニンは、さきにみたように「修正主義者」は、「闘争の形態ときっかけ」を変えて「闘争をつづけるもの」「マルクス主義の内部にあって敵対するもの」と規定しているのにたいして、榊氏は、「その方向は、意識的にあるいは無意識的に科学的、革命的なマルクス主義理論を、非科学的、ブルジョア的、改良主義的見解にとってかえることである」と説明していられる。この「意識的にあるいは無意識的に」という用語にどうかよく注意されたい。榊氏は、この文字を、おそらく「無意識的に」つかったといって言いのがれはされないであろう。「意識的に」つかわれたはずである。だが、いったい、「マルクス主義の内部にあって敵対し、闘争する」者が、その闘争を「無意識的に」するなどということが、いえるであろうか？　榊氏よ、「無意識的にとってかえる」とか、「無意識的に闘争する」とかいうことは、いったいどういうことなのか、どうか実例をあげて説明していただけないだろうか？　そして、そのついでに、あなたのいわれる「無意識的」な「修正主義者」の見本を、一人でも二人でも挙げていただきたいものである。こういうように「無意識的に」マルクス主義を「改訂」したり、これと「無意識的に」闘争したりする「修正主義者」もありうるとするならば、同じように、「無意識的に」修正主義とはなにかという名の本を書いたり、教

条主義というレッテルをはりつけて真の修正主義批判家をやっつけたりするような、「無意識的な」修正主義者という者もりっぱにありうるはずである。

「革命的労働運動・共産主義運動を実践的に導くマルクス主義の基本原則をねじまげ、これを亡きものにしようとするもの」という文句も、レーニンの論文の内容とはかなりへだたっているものである。「運動」はそれ自体りっぱな実践である。いったい、「実践的に導く」というのは、どういう導き方をいうのであろうか？　「実践的に」でない「導き方」でもあるというのであろうか？　「理論的に」導くなどという運動の「導き方」があるとでも、榊氏はいわれるのであろうか？　「基本原則」を「ねじまげ、これを亡きものにする」という一句は、さきの「実証ずみの根本命題を再検討、修正する」という一句と、どのようにして結びつけられるであろうか？　「ねじまげ」と「再検討・修正」とは、いったい、同じ意味の言葉だろうか？　修正主義は「基本原則」、「根本命題」を「訂正」し「修正」するのである。つまり、理論的には正しいが、しかし現実の一定条件のもとでは妥当しえない、というように、その一般妥当性を少々「改訂」するだけなのである。「ねじまげ」たり「亡きものに」したりなどするのではない。それでは「実証ずみ」という、榊氏自身の「名句」が泣くというものである。

要するに、榊氏は、ことさら「修正主義とはなにか」という題目を一方においてかかげながら、そのなかで修正主義とはなにかということのいちばん中心的な問題、つまり「マルクス主義の基本原則」がどのようなものであるかについてレーニン的説明をまったく与えていられないのであって、どのような根本原則をどのように「修正」しているかという肝腎かなめの説明なしに右のような題目の本をものされ、他の論者の真面目な修正主義批判にたいしては、同じく説明ぬきで「教条主義的」のレッテルをおしつける批判論文をものされているというわけである。われわれは

のちに、さらにたちいって、「修正主義」とはなにか、「教条主義」とはなにかについて、主としてレーニンの説明をよりどころとしてその具体的内容を明らかにし、榊氏が「修正主義」の具体的内容にふれることなしに、修正主義批判をおこなっていられることの意味をすこしく追究してみることにしたいと思う。

## 二

つぎに、第二点としてあらかじめ注意しておきたいのは、榊氏がしばしば用いられる「マルクス・レーニン主義者」という言葉についてである。すぐあとでみられるように、榊氏は、御自身をふくめて「わが国のマルクス・レーニン主義者」と称していられる。しかしすこし考えてみるならば、この言葉は、きわめて重要な意味をもったものだということに気がつかないわけにはいかない。いったい、「マルクス・レーニン主義者」というような名称は、簡単に自分で自分につけることができるようなものであるだろうか？　ある人が「自分はマルクス・レーニン主義者である」といつも自称しているとすれば、かえってそのことひとつで当人がとんでもないえせ「マルクス・レーニン主義者」であることを自分でひとに教えているようなものだ、ということにならないだろうか？

われわれは、「マルクス・レーニン主義者」という名称は、まことにすばらしい、名誉ある名称だと思っている。だが、それだけに、この名称に値しうると考えられる人は、きわめて少数しかないとおもわれるし、また事実そのとおりであるようである。マルクスに学びレーニンの教えを学んだ弟子ということだけでは、この名にはまだとうてい値しない。学び方にもいろいろあり、弟子にもさまざまな弟子があるのである。たとえば、ひとによっては、「共産党に入っている」ということでその人はりっぱな「マルクス・レーニン主義者」だとしているものもある。このよう

な考え方は、たしかに一理はある。本当にすぐれた「共産主義者」、「マルクス・レーニン主義者」でなければ共産党員にはなれないはずであるし、そういう人だけが共産党員であるはずであるからである。だが、事実はむしろ反対であって、共産党員になってからはじめて真の「共産主義者」、「マルクス・レーニン主義者」になるべく努力し奮闘しなければならないし、そのような奮闘努力によってはじめてそうしたものになりうるということになっているのである。だから、もちろん、共産党員であっても、「マルクス・レーニン主義者」の名に値しない者もありうるし、事実またその数はすくなくないのである。それ故、「共産党員であるから、マルクス・レーニン主義者だ」などと言うのは、うわっつらの、形式だけをつかまえて実質だと称する類いで、そのこと自体、反マルクス・レーニン主義的主張である。では、どうしてその人が「マルクス・レーニン主義者」であるということができるか？　どのような資格を具えたものがこの名称に真に値するものというのであろうか？　わたしは、その規準、または資格は、簡単なものではなく、その人の人間的存在全体にかかわりがあるもので、当然にたいへん多面的かつ高度のものでなければならないと思う。だから、これらの基準なり資格をあれこれ自分にあてはめてみて、自分で自分がその資格をもっているかどうかなどというように、もっぱら名称に関心をよせ、「だから自分はマルクス・レーニン主義者だ」などと自称したりするのは、そのことひとつで落第ものである。「マルクス・レーニン主義者」は、自分で自分にいろいろ点数をつけてみたり、また欠点や弱点が無いなどと自惚れたり、自称したりするようなことには、いっさい関心をもちえない者だからである。ある人がマルクス・レーニン主義者といえるかどうかということを問題にすることができ、またしなくてはならないのは、当の本人ではけっしてなく、その他の人々なのである。「マルクス・レーニン主義者」と称するのは、本人であってはならず、他の人々でなければならず、しかも、その本人の生活活動全体をしめくくって

最後に全体的評価としてその名にりっぱに値することがはっきりしたときに、はじめてその名称が与えられるというものでなければならない。

りっぱな「マルクス・レーニン主義者」と呼ばれるための資格または条件としては、わたしは、すくなくとも、つぎのものがあげられねばならないと、考えている。まず、マルクスの理論を十分正しく理解し、マルクス主義の主要内容である経済学説――とくに『資本論』と『帝国主義論』――を正確に把握して自分のものとし、マルクス・レーニンの革命理論を徹底的に身につけ、世界革命の経験をただしく総括して学びとり、さらに当該国の政治経済情勢を正確につかみ厳密な分析の上に正しい見透しを立て、正しい戦略と戦術をもってプロレタリアートを指導することができるし、また現実にりっぱに指導しつつある者でなければならない。そのうえに、さらに大切なことは、人間としてすぐれた資質をもち、労働者階級の解放事業に一身をささげて奮闘しながら、しかもつねに謙虚で己れをほこることなく――「指導者」ぶらず――、なんら報いられることを期待せず、自分自身にたいしてはこのうえもなくきびしく、つねに自己批判をおこたらず、敵以外の他人にたいしては寛容、誠実で、人をひきつける人間味に富み、誤りをおかした者や迷っている者にはつねにあたたかい手をさしのべて粘りづよく説得し、みちびき、正しい確信と勇気と力とを与えないではおかない人間的資質と理論的充実をかねそなえた者でなければならない。(3)

(3) 「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「指導者」の一人でいられる紺野与次郎氏は『共産党員の品性』という著書をものされて、「共産党員のあり方」を説明されている。わが国の「名誉ある共産党員」の品性がしばしば問題となっている事実に照らしてみるとき、紺野氏がこのように『共産党員の品性』について訓示的な書物を著わされたのは、まことに時宜をえたものということができよう。だが、しかし、このように「品性」という言葉をもって共産主義者の資質を示すのは、正しいものとはいえないであろう。なぜならば、マルクス主義理論を正しく把握していることが共産主義者としての第一の資質である

が、そのことは「品性」というような性質のものではなく、精神的能力の問題だからである。マルクス理論を正しく把握していることは、おのづからその人の「品性」に反映せざるをえないが、しかし、「品性」がいかにすぐれていても、理論的能力は別である。こうしたマルクス主義理論の正しい徹底的な把握が共産主義者の第一の資質であることはつぎにかかげるレーニンの懇切な説明に照らしても明白であるが、この肝腎の資質についての強調は、残念ながら紺野氏の右の著書の中には見出されないようである。もっともこの書物は、平党員のためのものであって、平党員は、マルクス主義理論を正しく徹底的に身につける必要がなく、「指導者」だけがこれをつかんでいればよい、というのであれば、話は別である。マルクス主義理論の徹底的な把握という文字のかわりにそこここに見出されるのは、たとえば、「マルクス・レーニン主義の原理を日本の現実に正しく適用し、日本の社会発展と革命運動の発展の法則を明らかにし……」という一句に代表されているように、「マルクス・レーニン主義の原則」の「活用」、「適用」という文字だけにすぎない（前出、二三―二四ページ参照）。だが、「マルクス・レーニン主義の真理」を正しく把握しえないで、どうしてこれを「活用」したり「適用」したりすることができるであろうか？しかも、その正しい把握は、ここに云われているように簡単なものではなく、むしろその正しい把握にこそ全活動を捧げるべきだといってもよいほどのものである。　そもそも「マルクス・レーニン主義の原理」などという文句をつかうことができるのは、マルクス主義理論を正しく把握していないことのひとつのあらわれとみてよいのである。この著書の題名の示すように「品性」をもっぱら問題として、マルクス主義理論の正しい把握を第一にすえないやり方が、レーニンの指示とどれだけはなれたものであるかということは、本文でつぎにかかげる引用によってもあきらかであろうと思われる。だが、「品性」そのものについても、検討に値することがすくなからず見出されるのであって、われわれは、紺野氏がその著書の第九節の題目にいみじくもつけられたように、「事実を尊重して」、事実によってこの「品性」の現実のあり方をあとでよくよくみてみることにしたいとおもう。

もし、右に挙げたマルクス・レーニン主義者としてのあり方についてのわたしの説明が散文的で説得力がないと、榊氏その他の「わが国のマルクス・レーニン主義者」がいわれるのであれば、――そして「謙虚に大衆から学び」などという文句はただの看板としか考えていない傾きも相当根強いものがあるようであるから、――だれも文句のつけようのないマルクス・レーニン主義者、レーニンそのひとが、共産主義者、つまりマルクス・レーニン主義者はいか

にあるべきかということについて、あますところのない説明を数多く残してくれているので、そのなかから、比較的まとまった説明と思われる箇所を三つだけ、つぎに引用してお目にかけることにしよう。この三つは、いずれも有名なレーニンの著作、『共産主義内の「左翼主義」小児病』のなかから抜粋したものである。その第一は、「ボリシェヴィキの成功の一基本条件」と題されたその第二節の中に見出されるもので、レーニンは、このテーマについて「なによりも問題なのは、プロレタリアートの革命党の規律は、なにによってささえられ、なにによって点検され、なにによって補強されるか、ということである」と述べて、つぎのように三つの「基本条件」を挙げ、これらについてきわめて的確な説明をあたえていてくれるのである。

「**第一**に、プロレタリア前衛の自覚によってであり、革命にたいするかれらの献身、かれらの忍耐、自己犠牲、英雄精神によってである。**第二**に、もっとも広範な勤労大衆、なによりもまずプロレタリア的な勤労大衆と、しかし、また非プロレタリア的な勤労大衆とも、結びつきをたもち、彼らと接近し、そう言いたければ、ある程度までかれらと溶けあう能力によってである。**第三に、この前衛の政治的指導の正しさによってであり、この前衛の政治上の戦略と戦術の正しさによってである**——ただし、それは、もっとも広範な大衆がかれら自身の経験によって、この正しさを納得するということを条件とする。これらの条件がないと、ブルジョアジーを打倒して全社会を改造すべき先進的な階級の党の実をそなえた革命党内の規律は、実現できない。これらの条件がなければ、規律をつくりだそうとする試みは、かならず、つまらぬもの、空文句、もったいぶったしぐさになる。他方、これらの条件は、一度に生じるわけにはいかない。それは、長期にわたる労苦とくるしい経験によってはじめてつくり上げられる。これらの条件をつくりあげるのを容易にするものは、**正しい革命理論**である。そして革命理論のほうは、教条ではなく、ほんとうに大

衆的な、ほんとうに革命的な運動の実践と緊密に結びついてはじめて、最終的にできあがるものである」（全集第四版、第三十一巻、八―九ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

榊氏やその他の「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちのなかには、この引用文をみて、「そんな文句は、とっくのむかしから知っている」といって、肩をそびやかす者もすくなくないであろう。だが、諸君、よく聞きたまえ。まさにレーニンが適切にも指摘しているように、「知っていることと、これを首尾よく実行することのあいだには、天と地ほどのへだたりがある」のである。ここに的確に示されている三つの条件をよく頭の中にいれて、つねにこれを正しく遂行することに全精力をかたむけ、レーニンの注意どおりに、これらを首尾よく実践することができたと自分でいいうる者が、はたして何人いるであろうか？　この一事をもってしても、自分自身をつかまえて、りっぱな、名誉ある「マルクス・レーニン主義者」などと自称することそのことが、どんなにうすっぺらな尊大さ、レーニンの「つまらぬもの、空文句、もったいぶったしぐさ」の最悪の例であり、どんなに恥づべきことであるかは、おのづからあきらかではなかろうか？「マルクス・レーニン主義者」というものは、むしろ、われわれがたえずそれに向って、真剣に、謙虚に、自己反省をおこたらず、けんめいに努力して到達しようとしなければならない目標であり、輝やかしい到達点であるといわなければならない。それは、まさに、この社会でもっともすぐれた人間の模範的な生き方を示したものというべきであろう。

それゆえ、かのレーニン自身でさえ、自分のことを「われわれマルクス主義者」と自称することだけしてみたり、それで「だからわれわれマルクス主義者の言うこと、やっていることは、みな正しいのだ」ということを暗黙の中に認めさせるなどというようなことは、一度でもやったためしはない。レーニンが「われわれマルクス主義者」という言葉を

つかう必要があったのは、「われわれマルクス主義者」が、他の人々の見解や行動とはちがって、どういう見解をもっているか、どのように行動しているかということを明確に示すことが課題となっているときにかぎられている。そして、そのほかの場合といえば、さきの引用が示しているように、「われわれ共産主義者」はいかにあるべきかということを明らかにする必要のあるばあいしかない。どんなばあいにも、「マルクス主義者」、「共産主義者」の考え方と行動を明らかにし、その本質を明確にすることが大切であるというときに、――あるいは、それらを明らかにしたのちに、――はじめて「われわれマルクス主義者」、「われわれ共産主義者」という言葉を用いたものである。どんなばあいにも、「われわれ共産主義者」と自称する言葉をもって自分たちの見解や行動が文句なしに正しいのだぞということを示そうなどという、あさましい、見下げた考え方は、当のレーニンのばあい、薬にしたくともなかったのである。ところが、レーニンとはちがって、「わが国のマルクス・レーニン主義者」がこの言葉を自分で用いるのは、えてして、この言葉によって、自分たち「マルクス・レーニン主義者」がうちたてた方針は完全無欠なものであり、自分たちのこれまでとってきた活動はすべて完全に正しく、しかも完璧に成果をあげたものだということを示そうという意図がうかがわれるばあいがすくなくないのである。自分たちの犯した重大な誤りにはいっさい口をとざして、すこしの誤りも犯すことがなかったし、また今後もありえないものとして、つまり、全く完全無欠なすばらしい「マルクス・レーニン主義者」として自分たちを描き出そうとする傾向は、「わが国のマルクス・レーニン主義者」にとって、根強い性向のように見受けられる。なぜというに、「わが国のマルクス・レーニン主義者」は、いまだかつて、重大な誤りを犯したときにさえ、自らの責任を卒直に認めて徹底した自己批判を公然となしとげたというためしはないし、どんな小さな誤りでもひたすら自分たちの無力、欠陥のゆえに犯したという自己批判をおこなったためしはな

いからである。たとえば、「アメリカ進駐軍は解放軍である」といったような世にも有名な「戦略規定」がうちたてられたときにも、近くは、同じく有名な「四・一七ゼネスト」のさいに重大な誤謬を犯したときにも、卒直な徹底した自己批判はついぞあらわれず、弁解と責任転嫁と「時効による誤謬解消」という便法がえてして役立てられたようである。かつて六全協の決議で、「これまで犯してきた甚しい誤りや理論的低劣水準」という言葉で「自己批判」めいた文章が公けにされたが、その誤謬というのが誰のおかした、どんな誤謬かはついぞ示されず、低劣水準ときめつけられた理論がどんな理論なのかもまったく示されず、この「自己批判的」決議ひとつによって、たちまちすべての誤謬、低劣水準の諸理論は救済され、万人ことごとく名誉ある「マルクス・レーニン主義者」に化することとなった。この決議は、まさに敗戦直後に日本の戦犯支配階級が唱えだした「一億総ざんげ」にも匹敵するものとして永く記念されるだけの値打ちを十分もっているのである。

ごらんのように「わが国のマルクス・レーニン主義者」は、いまだかつて重大な誤りや逸脱を犯したためしのない者、およそ誤りを犯したことを自己批判したためしのない世にもすぐれた「名誉ある」人々なのである。いつでもあるのは、自分たちは「大衆のため、労働者のため、農民のため、青年のため、老人のため、婦人のため、子供のため、……のためにたたかってきた」というりっぱな言葉であって、誤りを犯したり、逸脱したりしたものは、自分たち以外の「分裂主義者」だけ、「反党売党分子」だけだということになっている。レーニン自身にしても、またレーニンと同じような本当の「マルクス・レーニン主義者」にしても、ただ「……のためにたたかってきた」などという、内容のない、自己礼賛の文句など並べたてることはしないであろう。レーニンは、いつでも、われわれは……のために、どのようにたたかってきたか、そしてそのたたかいがどのような結果を生みだしたかということを明らかにし、だからわれ

われのたたかいは正しかったとか、あるいはときには、だからわれわれのたたかいは誤りであったとかいうようにして、その「たたかいの仕方」をあきらかにしている。「たたかい」にはいろいろのものがある。「下手なたたかい」もあれば「ためにならないたたかい方」もあるのだ。だから、どのようにたたかったかの説明をぬきにして、「……のためにたたかってきた」と並べたてたりするのは、押しつけがましく、当事者にとって迷惑千万なこともありうるのである。肝腎なことは「……のためにたたかった」にあるのではなく、「……のためにいかにたたかったか」にある。もしそれが「まことに正しくたたかった」というのであれば、それを示す成果を事実をもって実証してから、そう云うべきである。だから、自分たちの闘争について、その内容を正しく説明し、その成果を厳密に点検することこそが、その者が真のマルクス・レーニン主義者であるか否かを示す試金石の一つであることはうたがいない。そして、そのうえにもうひとつ加えるとすれば、その者がつねに真剣に自己批判を公然としているかいないかということも、重要な基準のひとつとなる。というのは、どんなに小さな誤ちでもまったく犯すことのない、完全無欠なマルクス・レーニン主義者というものは、この世に有りえないからである。

「わが国のマルクス・レーニン主義者」とはまったくちがって、レーニンそのひとは、いつでもどのようにたたかうべきか、そしてどのようにたたかってきたかを正確に説明し、それがどのような結果をもたらしたかを厳密に点検し、そのたたかいの中に生じた誤りをその根源にまでさかのぼって容赦なく摘発し、自己批判を徹底的におこなっているのである。さきに挙げた著作、『共産主義内の「左翼主義」小児病』は、各国の「共産主義者」の誤謬、欠陥を暴露してそれをいかに匡正すべきかを説明することを主たる課題のひとつとしているものであるが、その中で、レーニンの率いるボリシェヴイキ自身の誤りについてもはっきりと指摘し、つぎのように述べている。

「一九〇六年にボリシェヴィキが『国会』をボイコットしたのは、大きくなく、たやすく訂正できるものではあったが、とにかく一つの誤りであった。一九〇七年、一九〇八年とその後の数年間のボイコットは、もっとも重大な、訂正することが困難な誤りであった」（前出、一九ページ）。

この引用文のなかの「大きくなく、たやすく訂正できる誤り」という箇所に、レーニンは注記をして、つぎのように附け加えることをわすれなかったものである。

「個人にあてはまることは、政治と政党に――適当な変更をくわえて――適用することができる。誤りをおかさない人が、賢いのではない。そういう人はいないし、またありえない。あまり重大な誤りをおかすことがない人、その誤りを容易に、すみやかにあらためることのできる人が、賢いのである」（前出、一九ページ、傍点―山本）。

ごらんのように、レーニンはまことに適切に、しかも心あたたまる言葉をもって、「誤りをおかさない人はいないし、そういう人はありえない」と説明している。だから、自分たち自身をば「誤りをおかしたことのない」、「これからもおかすことのありえない」ところの「マルクス・レーニン主義者」として描き出している者がありとすれば、それは、レーニンの懇切な指示にまっこうから背反するものであって、そのことひとつで、その人たちはこの上もなくすぐれた反「マルクス・レーニン主義者」の資格をもつものといわなければならないであろう。

真のすぐれたマルクス・レーニン主義者とは、レーニンのいうとおり、「あまり重大な誤りをおかさない人、しかもその誤りを容易に、すみやかにあらためることのできる人」でなければならず、したがって当然に、敵をのぞくすべての人びとにたいしては寛容に、おのれにたいしてはこの上なくきびしく、という自己批判の必要が生じる。これに関連して、われわれがぜひとも心に留めておかなければならないのは、レーニンが同じ著作のなかで示している、つぎ

の適切この上もない教訓である。

「政党が自分のおかした誤りにたいしてとる態度は、その党がまじめであるかどうかをはかり、党が自分の階級と勤労大衆にたいする**義務**を実際にはたしているかどうかをはかる、もっとも重要で、もっとも確実な基準の一つである。**誤りを公然とみとめ、その原因をあばき出し、それを生んだ情勢を分析し、誤りをあらためる手段を注意ぶかく討議すること**、――これこそ、まじめな党の目じるしであり、これこそ、党が自分の義務をはたすことであり、これこそ、階級を、ついで大衆をも教育し、訓練することである」[4]（前出、三九ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

（4）　さきに挙げた紺野氏の著書『共産党員の品性』の第十節「実践によって誤りをただし、真相をつかむこと」のなかには、これと似たようなことが述べられている。――「誤りや失敗について、謙虚に、そして失望落胆しないで、その原因を研究し、どこに認識と政策、戦術の誤りがあったかを明らかにし、正しい認識と政策、戦術をつかめば、失敗は成功の母となり、敗北は勝利のもととなるのです。もちろん、同じ誤りと失敗をくりかえすことは正しくありません」（前出、二八ページ）。

この著書は、「名誉ある共産党員」、「すぐれた共産主義者」を対象として書かれているはずである。としたら、「同じ誤りと失敗をくりかえすことは正しくありません」などという無意味なくりかえしはまったく不要であるし、「正しい認識、政策、戦術をつかめば」「失敗は成功の母になる」というのもきまりきったことで馬鹿々々しい蛇足である。ただ、一見この説明は、レーニンの右の教訓と似ているかにみえるが、すこしく注意してみると、かなりのへだたりがあることに気がつく。レーニンは、「誤りを公然と認め、その原因をあばきだし」と云っているのに、紺野氏は、ただ「謙虚に、その原因を研究しどこに誤りがあったかを明らかにし」といっているだけである。第一に肝腎なのは「公然と認め、あばきだす」ところにある。それでなければ義務をはたすことにはならない。では、どのようにしてこの誤りを訂正するかという、第二に肝腎なことは、紺野氏のばあいには、なにひとつふれられていない。ただ「正しい認識と政策、戦術をつかめば」とあるだけである。つまり、「正しいものをつかめばよい」というのである。それでは、どうして誤りを訂正するかは全然問題にならない。どこかに「正しいものがころがっているのをつかまえれば」というだけのことである。こういう説明の仕方は、いったい、レーニンのいうとおり、その論者が「まじめ」であり、「自分の階級と大衆にたいする自分の義務を実際にはたしている」ものと、いうことがで

きようか？　レーニンは懇切叮嚀に、「それを生んだ情勢を分析し、誤りを改める手段を注意ぶかく討議すること」と説明している。どうやら、紺野氏が「共産党員の品性」を説く相手は、平党員であって、紺野氏自身のような「指導者」はその中にふくまれていないようである。なぜというに、もし、レーニンのように、まじめに自分自身をもふくめて共産主義者および共産党の問題として論じているのであれば、「正しい認識と政策、戦術をつかめば」などという、まるで「拾い物」のような説明の仕方はとうてい出てこないからである。紺野氏は、その「誤り」をもっぱら「認識と政策、戦術」にしぼっていられるが、この誤りの中には戦略の誤りもふくまれており、しかもこれがいちばん重大な意味をもっていることは、あらそう余地がないのである。いったい、党が「正しい戦略をつかむ」などという言葉が、まじめにとりあげられるだろうか？　そして、いまひとつ、もっと決定的に重大なことは、党の「指導者」がその誤りを「認識」しないし、また「認識しようともしない」という事態が、その「指導者」の「マルクス・レーニン主義者」的性格の度合の低さにしたがって、場合によってはおこりうるということである。

ごらんのように、レーニンは、真のマルクス・レーニン主義者であるか否かを区別するために必要不可欠な基準を、正確にわれわれに示している。念のために、これを箇条書きにしてみよう。

一、誤りを公然と認めること。
二、その原因をあばきだすこと。
三、それを生んだ情勢を分析すること。
四、誤りをあらためる手段を注意深く討議すること。

それゆえ、われわれは、これから「マルクス・レーニン主義者」とか「共産主義者」とか自称する人たちには、まずもって、右の基準をあてはめて、真剣にこれらの基準を守っているか否かを見きわめ、それによって、その人たちがその義務を実際にはたしているかどうかを判断することにしよう。レーニンの基準にしたがって的確な判断を下すこ

とができれば、その人がなんと自称していようと、結構である。ただし、これらの基準に照らしてあきらかに自分の義務をはたさず、また果そうともしないということが事実によって証明されたときには、真のマルクス・レーニン主義者のあり方を明確にする必要上、それらの人々を公然と「反マルクス・レーニン主義者」として摘発することが、良心的な読者にたいするわれわれの義務になるであろうということは、これを疑うわけにはいかないであろう。

さて、以上二つの事柄についての必要な予備的知識をもって、いよいよ主題に入ることにしよう。

## 第二節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その一）

### 一

榊氏の批判論文は、五つの節――一、修正主義および教条主義との闘争、二、トロツキストに歓迎されるにいたった「哲学」、三、「修正主義批判」というが……、四、独占資本を「強め」、労働者階級を「弱める」、五、セクト主義の主張、――から成っていて、その「一」は序論、「二」は藤本進治氏の著書の批判、「三」「四」「五」がわたしの著書の批判ということになっている。そこで、当面吟味の対象となるのは、「二」をのぞいたその他の四つの節である。「一」と「五」は、序論および結論になっているとみられるので、藤本氏の著書にかんする批判もふくまれているわけであるが、この「一」と「五」も、ひとまず、わたしの著書を対象としたものとして考察することにしたいと思う。

その「一」は、つぎのような書き出しではじめられている。

「わが国のマルクス・レーニン主義者は、たえず右翼日和見主義、修正主義とたたかうとともに、『左翼』日和見

主義、教条主義、セクト主義ともたたかってきた。

とりわけ、この数年来、国の内外でつよく現われてきた現代修正主義にたいしては、先駆的な闘争をおこなってきた。それによって、修正主義の危険な役割と本質はしだいに多くの人びとに理解され、修正主義の理論的実践的破たんもきわめて明瞭になってきた」。

ごらんのように、この文章そのものは、まことにりっぱで、一点非のうちどころのないようなものである。そして事実についてみても、もしここでの「この国」というのが、レーニン・スターリン当時のロシアや、毛沢東の指導する中国であるならば、実際にこのとおりであろうと思われる。だが、「この国」というのが、日本となると、そう簡単に肯定するわけにはいかない。

第一に、「わが国のマルクス・レーニン主義者」という言葉が問題であり、しかも、これを自分で称されているところが、すでに問題である。この自称そのものがすでに「マルクス・レーニン主義者」として必要な資質を欠いていることの証左であるということについては、さきにのべた。ところで、ここで「たたかってきた」というのは、いつからのことか？　おそらく相当以前からでなくてはならない。「この数年来」という文字が配されているが、この「現代修正主義が現われてきた」時期については、榊氏の著書がつぎのように、きわめて明確にこれを確定している。

「一九六一年一〇月のソ連共産党第二二回大会では、五六年の第二〇回大会当時からしだいに発展してきたフルシチョフらの修正主義思想がひとつの体系化をとげつつあることが明確化された」（前出、一一〇ページ、傍点—山本）。

つまり、榊氏にしたがえば「この数年来」というのは、「一九五六年」以降であり、「とくに一九六一年いらい」ということである。ところで一歩ゆづって、「一九六一年いらい」としてみても、その時に「わが国のマルクス・レーニ

ン主義者」は、どういう状況にあったであろうか？　現在、「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちによって「売党反党分裂主義者」との烙印をおされている志賀義雄氏、鈴木市蔵氏らは、当時りっぱに「指導者」の地位にあり、輝やかしい「マルクス・レーニン主義者」として中央委員会、幹部会に名を連ね、榊氏からも深甚の敬意を払われていたはずである。つまり、こういうことになる。――第一に、「わが国のマルクス・レーニン主義者」は、たとえその「指導者」であっても、ある時期に突如として「反マルクス・レーニン主義者」になりうるものであるということを、「わが国のマルクス・レーニン主義者」が実地に証明し、また「わが国のマルクス・レーニン主義者」自身がそれを認めている、ということが事実をもって示されているわけである。第二には、近々のうちに「反マルクス・レーニン主義者」になり「売党反党分裂主義者」になるはずの人物をばそういうものだと捉えることができないばかりか、事が判明するまで真の「マルクス・レーニン主義者」として、しかも「すぐれた指導者」として、ともに腕を組み協力してき、人民大衆にもそういうものとして宣伝していることができるという、まことにふしぎな感覚と弁別能力とをもった人たちが、事がにわかに判明するや否や、[5] 自身の不明や協力してきたという決定的誤謬にはいっさいふれることなく、自身の不明や誤りは認めようともせず、ただ志賀氏らに「売党反党分裂主義者」のレッテルをおしつけることによって、自分たち自身の絶対的な無謬性を誇示しようとしているものだということが、同じく事実で示されているわけである。さきに引用したレーニンの適切な教示、すなわち、「共産主義者はいかにあるべきか」についての的確にして緊切な指摘と照らしあわせてみるとき、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の事実が、それらとどんなにかけ離れたものであるかということに、いいかえれば、その「反レーニン主義的」な自己中心主義の深さに、ただただ驚きいるのほかないのである。この、両氏にかんする簡単な経過を見ただけでも、「わが国のマルクス・レーニン主義

者」というものが、なんと自称していようとも、ある時期にたったひとつの事件を契機としていつでも「反レーニン主義者」に転化してしまう可能性をもったものであること、つまり、可能的に「反レーニン主義者」であるということが、あきらかにうかがわれる。要するに、われわれとしては、これらの名称やレッテルにはいささかも惑わされることなく、レーニンの教示している基準にしたがって、厳正にその者の本質を判断しなければならない、ということになるのである。

（5）この点については、若干の注記を必要とする。というのは、志賀、鈴木両氏が「売党反党分裂主義者」にされたのは、両氏がこれまで主張してきた戦略上の意見なり、従来の行動なりがまったく「反レーニン主義的」ブルジョア的だということが明確にされたからではけっしてなく、たまたまソ同盟共産党（友党！）の提案した部分核停止条約にたいして――中委決議にそむいて――賛成の意を表するにいたったがためである。つまり、この条約案に賛成か否かという一事によって、両氏の従来の全活動が突如として「売党分裂主義的」だということになり、そして、その期に及んでやっと「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちは、両氏の「売党反党分裂主義的」本質に気がおつきになった、という次第なのである。

第二に、問題なのは、――しかも決定的に重大な問題なのは、――修正主義とのたたかいである。榊氏は、「わが国のマルクス・レーニン主義者は修正主義、教条主義とたたかってきた」、「国の内外でつよく現われてきた現代修正主義にたいして先駆的な闘争をおこなってきた」と主張していられる。真のマルクス・レーニン主義者であれば、このような二面的闘争をおこなうのは当然のことであって、闘争しないような者は、もちろんその名に値しえない。現代修正主義と先駆的な闘争をするからこそ、はじめて、マルクス・レーニン主義者といえるのである。だが問題は、まさに**どのようにたたかってきたか**にある。榊氏は、真のマルクス・レーニン主義者にふさわしい闘争をしてきたように述べられ、しかも先駆的な闘争をしてきたと明言されている。

だが、さきにみたように、榊氏たちによって「売党反党修正主義者」の張本人と烙印をおされた志賀・鈴木両氏をば一九六四年にいたるまで「わが国のマルクス・レーニン主義者」の一員として、しかもその輝やかしい「指導者」として仰いできたような「わが国のマルクス・レーニン主義者」である。「国の内でつよくあらわれた現代修正主義」の「巨頭」たる両氏にたいして「この数年来」なんらの闘争もおこなわないばかりか、これとかたく腕を組んで万事「満場一致」式たたかいをしてきた「わが国のマルクス・レーニン主義者」が、あとになって、どんなにりっぱに「修正主義」とたたかってきたのだと言ったところで、ひとが簡単に信用するだろうか？　だが、この「国の内」については、しばらく措くとしよう。誰しもひとを見そこなうことはありうるのだ。ことに「わが国のマルクス・レーニン主義者」ほど、しばしば「同志」を見そこなっていたということをあとから発見する者は、すくないのだから。だが、右のような事実が一方にありながら、榊氏が、「わが国のマルクス・レーニン主義者」が「この数年来、国の内外でつよく現われてきた現代修正主義にたいして、先駆的な闘争をおこなってきた」と明言していられるのであれば、――そして事実、その批判論文の冒頭ではっきり断言していられるのであるから、――、榊氏よ、どうか、そのことを事実を挙げて証明していただきたい。ことに、現代修正主義の巨魁と目されるフルシチョフ一派にたいして、「わが国のマルクス・レーニン主義者」がどんな先駆的な闘争をしてきたか、それを実証する事実を、たったひとつでもよい、どうかはっきりと示してくれたまえ。「先駆的」という言葉の意味は、榊氏もよく知っていて使われたものであるにちがいない。それは、国の内外で他の人々によってフルシチョフ一派の修正主義が暴露され、それが徹底的な批判を受けるよりずっと以前に、もっともはやくその一派の修正主義的本質を見抜き、他の人々に先きがけてこれと苛借のないたたかいをしてきた、ということである。いったい、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の

うちの誰が、いつ、どういう著作で、あるいは演説で、このような「先駆的闘争」をすることができたであろうか？　榊氏よ、あなたは、その著書『現代修正主義とはなにか』のなかで、「フルシチョフの修正主義思想」はすでに「一九五六年の第二〇回大会当時からしだいに発展してきた」もので、「一九六一年第二二回大会で、その修正主義思想がひとつの体系化をとげつつあることが明確化された」と明記していられることを、記憶していられるだろうか？　この、一九六一年にその「体系化」さえも「明確化」してきたフルシチョフ修正主義にたいして、「わが国のマルクス・レーニン主義者」は、早くも「先駆的闘争」をしてきたと、断固として主張されている。榊氏よ、「マルクス・レーニン主義者」と名乗られるからには、どうか、御自分の主張には責任をもってくれたまえ。なによりもまず、その事実を示したまえ。事実をもってそのりっぱな主張を裏付けたまえ。だが、もしそういう事実はまったく見当らず、その一つの実例も挙げられないとしたならば、われわれは、容赦なく、「わが国のマルクス・レーニン主義者」をもって、驚くべき大嘘つき、黒を白といいくるめて自分だけを偉いものにみせかける全くのブルジョア的利己心のかたまりの代名詞として、断罪しなければならない破目におちいらなければならないのである。

ところで、そういう事実をあげることは、榊氏には――いや、榊氏ばかりではない、「わが国のマルクス・レーニン主義者」のすべてにとって――まったく不可能であるであろうから、榊氏にかわって、ここでわたしが、「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちがどのように現代修正主義とたたかってきたか、どのように先駆的な闘争をしてきたかを疑う余地なく示す事実を、さしあたりほんのひとつだけ、挙げてみることにしよう。

つぎにかかげるのは、一九六一年六月、「日本共産党中央委員会理論政治誌」と銘うたれた雑誌「前衛」第一八二号に掲載された巻頭論文、「日本の『構造的改革論』者によるマルクス＝レーニン主義のわい曲」の中からの抜粋で

ある。この一九六一年という年は、さきに榊氏によって、フルシチョフ修正主義が一九五六年の発生からすでに五年をへてその「体系化」までも明確になった年として特徴づけられているものだ、という事実を、読者はどうか記憶にとどめられたい。

## 二

論文「日本の『構造的改革論』者によるマルクス＝レーニン主義のわい曲」は、その題名の示すように、日本の「構造改革論」者の批判をその目的としたものであるが、その論拠としているところは、きわめて特徴的なものがあるのである。この論文はその「1」で、まず、

「こんにちいわゆる『構造改革論』をふりまいている人びとには、佐藤昇、石堂清倫、長洲一二、今井則義、杉田正夫、松下圭一、小野義彦、大橋周治、前野良氏等（このなかには党員でない人びともふくむ）のほか、自称『構造改革論』学者という人びとの氏名をまだまだあげることができるが、私は時間的な都合のために、このうちの若干の人びとの所論について批判をくわえることにする。」（前出、二ページ、傍点—山本）

と述べ、その批判の要点をつぎのように説明している。

「いわゆる『構造改革論』者に共通していることは、ソ連共産党第二〇回大会でのフルシチョフ同志の中央委員会報告における『革命の平和的移行』に関する部分、ヨーロッパ一七カ国共産党の『ローマ・アピール』、『八一カ国共産党・労働者党声明』およびイタリア共産党の大会決定などを**故意に歪曲して**利用し、彼らの『理論』の正しさを立証しようとしていることである」（前出、二ページ、ゴシック体および傍点—山本）。

そこで、佐藤昇氏の所説をとりあげて、

「資本主義から社会主義へ革命が平和的に移行できるという問題は、佐藤昇氏によれば『多くの資本主義国では暴力によらずに平和的に、また議会的手段を用いて社会主義へ移ることが可能になった…』といい、さらに一九六〇年一一月の『八一ヵ国共産党・労働者党声明』もこれを承認し、それに加えて『国の政治、経済の民主的改造、すなわち反独占の民主主義的革新と構造改革によって社会主義への途をきりひらくという欧州一七ヵ国共産党のローマ・アピールの路線がとり入れられていることである』(『世界』二月号、「体制の変革と平和共存—モスクワ声明の理論的諸問題とその歴史的系譜——」)といっている。」

と述べ、さてそこで、佐藤昇氏ら「構造改革論」者の意見に対立させて、フルシチョフ同志の第二〇回大会報告の趣旨を説明し、それがいかに「正しい」ものであるか、そして、佐藤氏らがいかにこの「正しい」フルシチョフ報告を歪曲しているかということを、あきらかにしようとして、つぎのように主張する。以下、いささか長きに失する嫌いはあるが、この論文の関係箇所は、行論においても重要な意味をもつものとして参照する必要があるので、それをあますところなく引用することにしよう。

「革命的立場に立っていないこの評論家[佐藤昇氏—山本]は、ソ連共産党第二〇回大会や『モスクワ声明』、『ローマ・アピール』などを白昼多数の人びとの目の前で平気で改作することを何とも思っていない。**かれらの立場の正体はN・フルシチョフ同志の次の言葉を引用しただけでも明らかである。**

『レーニン主義は、支配階級がみずからすすんで権力をゆずることはない、とおしえている。しかし、闘争がどの程度にはげしくなるか、社会主義への移行に暴力をつかうか、つかわないかは、プロレタリアートの態度できまるのではなくて、むしろ搾取者がどの程度に抵抗するか、搾取者階級自身が暴力をつかうかどうかによってきまるのである。……しかしそれいらい、

歴史的情勢は根本的にかわり、この問題にたいしてあたらしい態度をとることができるようになった。社会主義と民主主義の勢力は、全世界ではかりしれないほどおおきくなり、資本主義ははるかによわくなった。……同時に、現在の諸条件のもとで、いくつかの資本主義諸国の労働者階級は、国民の圧倒的多数をその指導のもとに統一し、基本的な生産手段を人民の手にうつす現実的な可能性をもっている。右翼ブルジョア政党とその政府は、ますますひんぱんに破産状態におちいっている。こうした情勢のなかでは、労働者階級は、勤労農民とインテリゲンチャとすべての愛国勢力とを自分のまわりに結集し、資本家・地主と妥協する政策をすてきれないでいる日和見分子をだんことしてしりぞけながら、人民の利益に刃むかう反動勢力をうちまかし、議会で安定した多数をしめ、議会をブルジョア民主主義の機関から真に人民の意志を代表する道具にかえる可能性をもっている。……資本主義がまだ強く、巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っている国ぐにでは、反動勢力はもちろん、激しく抵抗するにちがいない。そこでは、社会主義への移行は、激しい階級闘争、革命闘争を伴うであろう。社会主義への移行の形態はどうあろうとも、決定的で欠くことのできない条件は、その前衛を先頭にたてた労働者階級の政治的指導である。それなくしては社会主義への移行はできない。」（N・フルシチョフの第二〇回大会「中央委員会報告」）

私がながながとフルシチョフ同志の言葉を引用したのは、革命の平和的移行の問題を、いわゆる『構造的改革論』者らがフルシチョフ同志の報告やモスクワ会議のこれに関する部分を**まったくはき違えて考えているために、真意を誤りなく正確につかんでもらうためである**。二〇回大会の報告にも明らかなようにフルシチョフ同志は多くの発達した資本主義国では革命は無条件にどこでも平和的に移行できるなどとは一言もいっていない。ましてや民主主義的革新と『構造改革』によって社会主義への道が安易に開けるなどとは言っていないのである。フルシチョフ同志が強調しているのは、こんにちでは十月革命時代と違って十億の人口をもつ強大な社会主義体制が存在し、その影響が全世界の労働者、農民、インテリゲンチャを引きつける力となっていること、またいくつかの資本主義国では労働者階級の力が国民の圧倒的多数にその指導的力をおよぼしていること、たとえばイタリアのように共産党が二〇〇万の党員をもち、六〇〇万の労働者を結集している労働総同盟を指導下におき、百数十万の農村労働者の組合と、数百万人の

農業協同組合を指導し、ファッショ支配を打倒する上で決定的な力を発揮したパルチザン組織などを、現にその指導下に掌握しているイタリア共産党などの民主勢力の強大な国ぐになどを考慮に入れて発言しているのである。しかもイタリアでは、ファシズムをうち倒すという民主主義革命が終戦直後に大規模に展開された。加えてこんにち資本主義諸国においてもっとも民主的な憲法といわれるイタリア憲法をもっていることである。しかも、この憲法はイタリア共産党の強力な影響のもとにつくられている。この憲法を制定する憲法会議の議長がコミンテルン時代からの古いイタリア共産党の指導者ウンベルト・テルラチーニ同志であったことをみても、共産党の指導がこの憲法の内容に深くつらぬかれていることがわかるであろう。

フルシチョフ同志は、このような諸条件のそなわっている国について平和的な移行の可能性を考慮に入れることができることをのべているのであり、さらに前記引用文の最後の部分で、資本主義がまだ強く、巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っている国では、社会主義への移行は激しい階級闘争、革命闘争を伴うであろうといっているのである。**もちろん激しい階級闘争、革命闘争といえばただちに武力革命だとすることは間違いである。**」（前出、二一四ページ、傍点および**ゴシック体**—山本）。

ごらんのように、この論文の著者は、「わが国の『構造改革論』者の正体を明らかにする」ために、ことさら「フルシチョフ同志」の第二〇回大会における「報告」の中から長い引用をこころみ、この「フルシチョフ同志」のすぐれた、正しい「報告」をば「わが国の『構造改革論』者たち」が「故意に歪曲し利用し」ている、と主張しているのである。そしてその「故意に歪曲して」いるということは、どういうことかといえば、「革命の平和的移行の問題を、いわゆる『構造的改革論』者らがフルシチョフ同志の報告をまったくはき違えて考えている」ところにあるのであって、

「二〇回大会の報告にも明らかなようにフルシチョフ同志は多くの発達した資本主義国では革命が無条件にどこでも平和的に移行できるなどとは一言もいっていない」し、「ましてや民主主義的革新と『構造改革』によって社会主義への道が安易に開けるなどとは言っていない」ということを理解しえない点がかれらの致命的な欠陥である、と主張している。つまり、この論文は、「平和的な移行の条件」のある国では「平和的な移行」が可能であり、「条件」のない国では「はげしい階級闘争、革命闘争」を、しかも「武力革命でないはげしい革命闘争」(!?)を伴うとフルシチョフ同志は述べていて、これは完全に正しいマルクス・レーニン主義的主張であるのに、「わが国の『構造改革論』者たち」は、これを教条主義的に(!?)拡張解釈して「無条件にどこでも平和的に移行できる」としているのはけしからん、というように「論破」しているのである。そして、さらにこの著者は、その「条件」のそなわっている国として、「イタリア」を挙げ、佐藤昇氏が「いわゆるトリアッティ路線が資本主義諸国における普遍的な社会主義への接近形態として国際的な確認をうけた」と述べているのを反駁して、「『構造改革論』者は、よく『イタリア路線』あるいは『トリアッティ路線』と称して、イタリア共産党が『構造的改良』の問題提起をした根拠を完全に無視して『構造的改良』をつみ重ねていくことによって、発達した資本主義国では何処でも平和のうちに社会主義へ移行できるかのようなことをいいふらしている」が、これはまったくの誤りであって、この「構造的改良」はイタリアの特殊な「条件」のもとでのみ正しいものであることを述べ、「われわれはイタリア共産党のこのコースに反対するものではない。これはイタリアの同志たちがいうように『社会主義への平和的・民主主義的イタリア的な道』なのである」として、この「イタリアの道」を支持することを明らかにしているのである。

以上によって明らかなことは、右の論文の著者が、「フルシチョフ同志」の「報告」を全面的に正しいものとして、

「資本主義の発達した国では、つねに平和的な移行か、さもなければ、武力革命でない、はげしい革命闘争[6]による移行」が可能であり、この「平和的な移行」の例として「イタリアの道」を挙げて、同じく全面的にこれを支持している、ということである。周知のように「わが国の『構造改革論』者」は「イタリアの道」の「直輸入元」でもあるわけであるから、要するに、右の著者と「わが国の『構造改革論』者」とのちがいは、たんに、「平和的移行」について、「条件」をつけるかつけないかのちがいにあるようにみえるが、しかし、「わが国の『構造改革論』者」とて「どこでも無条件に」などと言っているわけではなく、「平和的移行」を可能にする「条件」が「わが国」にもあてはまるから「構造的改良」は可能だ、と主張しているのである。このようにみてくると、右の批判論文の著者と「わが国の『構造改革論』者」とは、「フルシチョフ同志」の「報告」を全面的に支持し、「イタリアの道」を完全に支持している点ではまったく同じであり、現在の「発達した資本主義国」に「平和的移行」の可能性があることを認める点でも完全に同じ立場に立っているものであること、そのちがいは、その「平和的移行」の「条件」を「わが国」について認めるか認めないかのちがいにすぎないということがしだいに明らかになってくる。だから、この批判者にして、もし、「わが国」に「平和的移行」の可能性があることを主張するとすれば、両者の間には、本質的なちがいはまったく無くなり、ともに「フルシチョフ報告」および「イタリアの道」の完全な支持者、礼賛者ということになるわけである。

(6) フルシチョフがその「報告」の中で「資本主義がまだ強く、巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っている国々では、……社会主義への移行は、激しい階級闘争、革命闘争を伴うであろう」と述べているさいの、「激しい階級闘争、革命闘争」が「武力的革命闘争」にほかならないことは、誰でもたやすく読みとれるところである。ところが、この著者は、フルシチョフよりはるかに「平和的方法」に執着しているとみえ、これをも「武力革命とすることは間違いである」と強調することを忘れ

ないのである。これは、フルシチョフに輪をかけた「平和至上主義者」というべきであろう。

ところで、右の著者が完全に正しいものとして引用した「フルシチョフ同志」の第二〇回大会「報告」の中の一節ほど、フルシチョフたちソ同盟共産党指導部の「反レーニン主義的主張」、その徹底した「修正主義」的変節を示しているものはないのであって、報告からの右の引用箇所については、わたしが、拙著『構造改革論批判』の中で、二三七ページから二七九ページにかけて、実に四三ページをついやして、それが、どんなに「強力にもとずくプロレタリアートの独裁」という「共産主義の基本原則」(レーニン)をふみにじったものであるか、ということを詳細にわたって厳密に検討し、批判しているのである。そしてこのような批判が必要不可欠であったのは、実に、「わが国の『構造改革論』者」の修正主義的主張にとって「フルシチョフ報告」および「イタリアの道」こそが、その理論的支柱となっていたからであり、まさに「フルシチョフ報告」こそ、すべての現代修正主義思想にとっての指導的な基調を成すものであったからである。

ところで、榊氏もまた、一九六六年になってようやく当時をふりかえって、その著書『現代修正主義とはなにか』の中で、「フルシチョフの修正主義思想」が「五六年の第二〇回大会当時から」すでに「しだいに発展してきた」(前出、一一〇ページ)と述べ、さらに、御叮嚀にも、

「いずれにせよ、一九五〇年代の後半から六〇年にかけてはフルシチョフに代表される現代修正主義の潮流がソ連内にはびこりはじめ、これにともない政治・イデオロギー上の葛藤も、修正主義批判もあったものの、そのなかで修正主義潮流がジグザグをたどりながらも急速に明瞭な形態をとっていった時期ということができるであろう。」(前出、一〇〇ページ、傍点—山本)

との断定を下していられる。

中国共産党の苛借ない徹底的な批判によって「フルシチョフ同志」の修正主義的本質が明らかにされてから、つまり、事が判明してからずっとあとになって、「一九五〇年代後半から六〇年にかけて、五六年の第二〇回大会当時から、すでにフルシチョフの修正主義思想は明瞭な形をとっていった、しだいに発展していったものである」などと説明することはいと簡単であって、「マルクス・レーニン主義者」ならずとも、誰にだってできることである。肝腎なことは、そして、マルクス・レーニン主義者にとってなによりも必要なことは、――というよりも、むしろ、その義務となっていることは、というべきだが、――一九五〇年代の後半に、一九五六年の第二〇回大会報告に接するやいなや、そのときただちにその修正主義的本質を看破し、これと苛借なく徹底的に闘争して、「レーニン主義の基本原則」を明らかにし、擁護しなければならないということ、これである。

榊氏よ、御自身のさきの言明、断定に責任をもってくれたまえ。そしてどうか、はっきりとお答えいただきたい。右の一九六一年六月の「前衛」の巻頭論文の著者は、はたして、「修正主義とたたかってきた」ものであるのかどうか、りっぱに「マルクス・レーニン主義者」としてこれと「先駆的な闘争」をしてきたものであるかどうか？　このような著者は、はたして、「マルクス・レーニン主義者」の名に値するかどうか、「名誉ある共産党員」と自称することが、いったい、許されるかどうか？　ということを。

そして、その上で、「わが国のマルクス・レーニン主義者が、現代修正主義とりっぱにたたかってき、しかもこれと先駆的な闘争をしてきた」という、榊氏自身の言明が、「マルクス・レーニン主義者」に恥じないりっぱな主張であり、事実に合致したものであるかどうかを、卒直にお答えねがいたい、どうか、はっきりと、そして、御自身の

言明や断定に責任をもって、はっきりと答えてくれたまえ。そのお答えをいただいたときに、それへのお返しとして、われわれは、右の巻頭論文の著者が誰であるか、その正体を榊氏にお明かしすることにしたいと考えるものである。

（一九六七、二、一六）